

『小学読本』の挿絵に関する一考察——「人形」モチーフの変化を中心に——

吉良 智子

はじめに

今日『小学読本』は、近代日本においてはじめて作成された国語の教科書として知られている。明治六年に初版が、翌年には早くも改正版が出され、近代化を推進した明治政府の教育における急速な対応ぶりは、それが近代国民国家の根幹に関わるという認識があったことに他ならない。

すでに多くの先行研究において、『小学読本』に関する教育史・社会史的研究が進展しており、その歴史や各地域への伝播状況、子どもへの教育的効果や影響などが考察されている。

古田東朔による『小学読本便覧 第一巻』（武蔵野書院、一九七八年）や望月久貴『明治初期国語教育の研究』（溪水社、二〇〇七年）、府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究 リテラシー形成メデイアの教育文化史』（ひつじ書房、二〇一四年）などにより、『小学読本』の歴史や国語教育史のなかでの位置づけが明らかにされている。これらによってすでに言及されているとおり、『小学読本』は、アメリカにおいて使用されていた教科書『Marcus Willson, *The Readers of the School and Family Series*. New York: Harper & Brothers, 1860（以下、『ウィルソン・リーダー』とする。）

を翻訳したものはあるが、完全な訳書ではなく、日本に導入するにあたり、改編や追記がなされている。また、『小学読本』はいくつかの改訂版や『ウィルソン・リーダー』に基づかない類似教本、文部省で発行された『小学読本』を基本としながらも、各地方の風土や風習に合わせたローカルな教本などの存在が多数確認されている^①。

しかし、先行研究においては、ジェンダーの視点を導入した『小学読本』に関する論考はほとんどない。『ウィルソン・リーダー』は、子どもが国語としての英語構文をよりよく把握できるよう、彼らの生活実態に即した、日常的な場面が舞台となっている。そこには西欧近代社会における男女のジェンダー差異が如実に表われている。国語以外の教科書に目を向ければ、教科書はたしかに子どもに対し、ジェンダー意識に基づいた教育を行なっていたことが指摘されている^②。

『ウィルソン・リーダー』が『小学読本』として翻訳された際、日本の社会的・文化的状況に合わせて細かい改編が加えられている。その改編は子どもの文章理解を助ける役割を担っていた挿図にも及んでいる。また、改正版は、初版のわずか一年後の刊行であるにもかかわらず、文章ばかりか挿図もかなり変化している。ここには、西欧近代社会からもたらされた新しい価値

観、すなわち近代社会の基盤をなすジェンダー規範の初等教育における導入の過程を見ることができないのではないだろうか。

本論文では、そのなかから、①文部省編纂、師範学校彫刻『小学読本』（明治六年三月）と②師範学校編纂、文部省刊行『小学読本』（明治七年八月改正）、そして③『ウィルソン・リーダー』の三つの教本を比較する。①と②は、どちらも『ウィルソン・リーダー』を翻訳した教本であり、刊行年の異なる二冊、つまり、典拠となる③との比較を行ないつつ、初版と改訂版の相違を見ることで、より綿密にジェンダーの視点からみた近代的教育のなかの子ども観―本論文においては主に女兒―を探ってきたい。

そこで、まず先行研究によりつつ『小学読本』の歴史をふりかえる。次に『小学読本』の初版と改正版とを文章の絵画化の際の場面選択、モチーフの変化という視点から比較する。その際に、とりわけ着目したいモチーフが、「人形」である。先に述べたように、元となった『ウィルソン・リーダー』は子どもにとって親しみやすい内容、たとえば遊戯や家庭に関するエピソードなどをふんだんに採用している。人形は女兒向けの玩具として頻繁に登場し、男児向け玩具との積極的な差異化が図られている。しかしながら、前近代の日本において人形は、女兒のみに属するものではなく、明治初期の西欧近代社会と日本の間には、人形をめぐる認識の相違が横たわっている。³したがって、人形モチーフに特別の関心を払いつつ、明治初期の国語教科書が果たした役割を、ジェンダーの視点から考察したい。

一 『小学読本』と近代的教育

1 近代的教育と学制⁴

文部省は、最初の課題として欧米の教育制度を研究し、それらを模範として、一八七二（明治五）年に「学制」を公布した。学制は近代教育制度に関する最初の法令である。これにより理念としては、すべての国民は組織的な教育機関に学ばなければならないことになった。特に小学校には「すべての子どもが学ばなければならない」という近代学校制度に欠くことのできない基本方針が示された。したがって寺子屋から近代学校制度への改革をするにあたり、教材や教授法もそれに即した内容が検討された。文部省は同年、「小学教則」を公布し、小学校における教科や教授法に関する基本方針を示したが、寺子屋から改造されたばかりの小学校には実施できない内容だった。そこで、直轄の東京師範学校において新しい小学教則を編成させた。新しい小学教則では、寺子屋における教育を踏襲した上で、読物・算術・習字・書取・作文・問答・復読・体操の八教科が編成された。

教科書に関しては、後の時代に編纂された国定教科書のような統一された教科書はまだなく、文科省は明治五年の「小学教則」では教科書として使用する書籍が示されていたが、これらは小学校教科書として編集出版されたものではなく、一般書を一時的に教科書として指示したものだ。そのため、文科省は教科書の編纂を急いだ。明治六年、文部省および東京師範学校で編集出版された教科書は、順次各府県で翻刻され、全国に普及することとなった。

2 『小学読本』について

今回使用する明治六年に刊行された田中義廉編『小学読本』は、八教科のうち、「読物」の授業の教科書として使用された。今日では明治初期に使用された国語教科書として位置づけられている。翌明治七年には、那珂通高が校正し改訂版として刊行され、当時最も普及した国語の教科書となった。明治十年代に復古主義の機運が高まり、外国書を翻訳した教科書は適さなくなり、一八七九（明治一二）年に学制が廃止、同時に「教育令」が公布された際に、『小学読本』も使用が禁止された。しかし実際には以降も全国の小学校で使用され続け、明治二十年代に入りようやく新しい読本が使用されるようになった。⁽⁶⁾

『小学読本』は、巻一（巻之一）から巻四（巻之四）からなる全四冊で構成されている。そのうち、巻一と巻二は、『ウイルソン・リーダー』の翻訳となっている。『ウイルソン・リーダー』は全六巻からなり、そのうち田中は *The First Reader* と *The Second Reader* を翻訳した。これらのリーダーは、道徳や社会規範などの学習を目的としたものであり、翻訳するにあたり、明治初期の日本に会わせて、受容と排除が行なわれている。ドウトカ・マウゴジャー氏は、ピューリタニズムに対する姿勢に着目し、田中による『小学読本』が『ウイルソン・リーダー』の論理をおおむね受容しながらも、その解釈の範囲を広げ、前近代から地続きの日本的な要素、つまり儒教的解釈を加えることで、幅広く受け入れられ、かつ近代国民国家としての国民文化を創出したことを示唆している。⁽⁶⁾

だが、勤勉を重じる立身出世主義は男児のみに適応されたライフコースで

あることは、多くのジェンダー史研究の蓄積によってすでに明らかにされている。男女共通の教科書であった『小学読本』では、明治初期の女兒に向けていかなる将来の選択肢を用意したのだろうか。

二 『小学読本』の人形に関する画像の分析

1 描かれた子どもの遊戯

『ウイルソン・リーダー』には、子どもの遊戯に関する記述は多い。代表的なものには、凧揚げ、野球などがあるが、比較的多く登場するのは、「人形遊び」と「輪廻し」である。それを踏襲して『小学読本』にも人形遊びと輪廻しの挿図が採用されている。輪廻しは、江戸時代では「たが回し」と呼ばれた子どもの遊びとして定着していた。⁽⁷⁾ 輪廻しについては後述するが、少なくとも『ウイルソン・リーダー』には女兒に輪を持たせた図版もあり、必ずしも男児限定の遊戯としては表現されていない。一方で、人形やその遊び方に関わる記述や挿図はどうであろうか。

ここからは、人形に関する記述と挿図について、『ウイルソン・リーダー』、『小学読本』の初版と改訂版の三書籍を比較しつつ、明治初期において近代的ジェンダー観をいかに受容したのかを検討する。『ウイルソン・リーダー』において、人形に関する記述と挿図が、ペアで登場する箇所は三箇所ある。それらはすべて『小学読本』でも初版、改訂版ともに、改編を施された上で採用されている。仮に、タイトルを（女兒と人形）、（玩具店）、（女兒と男児）と名づけ、図像とともに記述についても、『小学読本』に記載される

にあたり、いかに翻訳されているか、いかなる改編が加えられているかに着目しながら分析する。また、『ウィルソン・リーダー』の日本語訳はすべて筆者による。

2 (女兒と人形) における翻訳と改編

『ウィルソン・リーダー』において、(女兒と人形) について次のような文章が記されている。

Ann has a nice doll, and she has a hoop, too. Would you like a hoop and a doll?

Would you take good care of a doll?

Could you roll the hoop? Could you make it go fast? Would it go as fast as you could go?

Ann has a stick to make her hoop go. Could you roll your hoop with a stick?

Ann makes her hoop go fast, and she must run fast to keep up with it.

(アンは良い人形を持っています。彼女は輪も持っています。輪と人形はいかがですか。

あなたは人形の世話はしますか。

あなたは輪を廻せますか。速く廻せますか。できるだけ速く廻せますか。

アンは輪を廻す為の棒を持っています。あなたは棒を使って輪を廻せますか。

アンは輪を速く廻します。彼女は輪に追いつくために速く走らなければなりません。)

挿図では、白人の女兒が室内で輪廻しの輪を右手で持ち、左手では、オットマンに座らせた人形の右手を握っている【図1】。図像上は輪と人形は女兒にとって並列に扱われている。本文においても輪と人形は、どちらも等しく玩具であり、この項目に関する限り、ジェンダー的差異は見られない。

一方『小学読本』初版では、翻訳をする際に次のようにやや改編が加えられている。

此の子は、愛らしき人形と、輪を持てり、○汝は輪と、人形を好むや、○汝は、人形を、大切に弄ぶや、○汝は、人形を、舞し得るや、○此女子は、輪を廻す為に、棒を持てり、○輪を速うに廻すには、速うに、走らざるを得ず

おそらく「舞(は)す」と「廻はす」を懸けることで、『ウィルソン・リーダー』が本来備えていた音読する際のリズムを重視したと考えられる。だが、それにより、「人形の世話」という近代において女兒が学ぶべきケア役割が削除されている。また、「良い人形」は「愛らしき人形」という訳が与えられ、良い人形、すなわち女兒が愛着を持てるような人形であることが示されている。挿図は、椅子とテーブルを備えた洋室ではあるものの、白人の女兒は着物を着た日本の女兒に変更されている【図2】。日本の子どもにとって

なじみのある表現が目指されたと考えられよう。

次に改訂版を確認すると、さらなる改編が加えられている。

此女子は、愛すべき人形を、持てり、これ等は、遊ぶに宜しき、具なり、必大切に、弄ぶへし、○人形を、舞はずときには、静に、動かして、毀るべからず、

挿図では、背景と輪が消され人形と女兒だけが描かれている【図3】。文章に関して言えば、「愛らしき人形」は「愛すべき人形」に変化し、また「大切に」「毀るべからず」など、人形の扱いに関する表現が追加されている。この改編に関して、増淵宗一氏による研究では、女兒にとって人形とは愛さなくてはならない存在となり、女兒と人形だけがクローズアップされて描かれることで、より深く女兒と人形との関係性が強化されたと分析されている⁽⁸⁾。翻訳される際に重視されたポイントは、人形と女兒の分かちがたい結びつきであり、それは改訂版を経てより強化されることになったといえる。一方で、人形の世話に関する表現が削除されている。近代国民国家における女性のケア役割に対する関心の低さは特筆に価しよう。

3 (玩具店) における翻訳と改編

『ウィルソン・リーダー』では、玩具店に買い物に訪れたおばと姪の会話として(玩具店)を描写している。

Jane has gone with her aunt to a toy shop, to buy some toys. Do you see the toys in the shop?

Jane asks her aunt to buy a doll for her. She says, Ann has a doll. Do you see Jane point to the dolls on the shelf?

Is not Jane too old to play with dolls? Jane, which would you like to have me get: a doll or a hoop?

Jane says she would like both. Jane likes to have all the toys she can get.

But Jane is a good girl; and she says she will be kind to the doll, and take good care of it.

So Jane's aunt got the doll, and the hoop too; and Jane took them home with her.

(ジェーンはおばと、おもちゃを買いに、玩具店へ出かけました。店には玩具がありますか。

ジェーンは人形を買ってほしいとお願いました。彼女が言うにはアーンは人形を持っています。ジェーンが棚の人形を指差しているのがわかりますか。

ジェーンは人形遊びをするには大きくなりすぎていないですか。ジェーンは、人形と輪とどちらが好きでしょう。

ジェーンはどちらも好きだと言いました。ジェーンは買えるすべてのおもちゃがほしいのです。

でも、ジェーンは良い子なので、人形にやさしくして世話もすると言いました。

だから、ジェーンのおばは、人形と輪も買いました。ジェーンは家に

持って帰りました。」

挿図では、男性店員が右手で人形を持ち、二人に勧めるようなしぐさをしている。店にはトルソーのような上半身のみの人形、ドールハウス、面、ラッパ、太鼓、木馬そして、文章中にも登場する輪が左端の壁の目立つ位置に単独で掛かっている。ジェーンと思しき女兒は店員の掲げる人形を指差している【図4】。おおむね（玩具店）のシーンを再現しているといつてよいだろう。

文章においては、ジェーンは人形も輪も好むが、人形の世話を約束することで、両方を与えられるという展開をみせる。女兒が輪を好むことは否定されないが、ケア役割を引き受けた上での交換条件となっているといえよう。

次に『小学読本』初版の（玩具店）を確認する。

母が小児を携へて、人形を買ふ為、小間物屋にいきたり、○汝は此店に多くの小間物のあるを、見たりや、○母が、小児に向ふて、何れの人形を、求むるやと問ふに、小児は自ら好む人形を、指し示せり、○此小児は人形ばかり弄びて、飽くときは、輪を弄ぶことを好むべし、○其外、店に列ねたる品は、皆小児の好むものなれども、此小児は、よき娘なれば只人形のみを愛し、能く心を用ゐて、傷むることなし、

挿図では、（女兒と人形）同様、登場人物を着物姿の日本人に置き換えている。特に女兒に関しては、頭髮が芥子坊主となっており、前近代的雰囲気の色濃く残している。一方でカウンターの店員やインテリアは西洋的であり、

未だ途上にある欧化政策を思わせる【図5】。だが、大きく変わっているのは商品としての輪の扱いである。人物同様、面や太鼓は日本風に改められているのは予想できることだとしても、文章中で人形の対比として言及のあった輪は、相対化されて左端の奥まった場所に収まっている。

輪の相対化は、人形の特別視と同時進行で翻訳でも行なわれている。輪はもはや選択肢のひとつではなく、「何れの人形を、求むるや」という母（おばは母に変更されている。）のセリフにもあるように、初めから人形を購入することが前提となっている。輪は遊びに飽きた場合の第二選択という位置づけである。

また、「此小児は、よき娘なれば只人形のみを愛し、能く心を用ゐて、傷むることなし」という解説からは、『ウィルソン・リーダー』における元の文章が、ケア役割を女兒が引き受けることによつて輪を獲得するというストーリーであったのに対し、『小学読本』初版では、ケア役割の受容場面が排除され、「良き娘」とは無条件に人形を愛さなければならぬという論理が展開されるのである。

改訂版では、次のようにさらなる改編が加えられている。

母は、小児に、向ひて、何れの、人形を、求めんとするやと、問ふに、小児は好むところを、指し示せるなり、○此小児は、人形のみを、弄びて、倦むるときには、何事をなすや、○毬を弄ぶことを、好むなるべし、○此店に、列ねたる品は、皆小児の、好むものなれども、此小児は、静なる娘ゆゑに、人形を、愛して、能く心を用ゐ、これを損ひ毀ることな

し、
輪は完全に削除され、代替として「毬」が提示される。毬は基本的に女兒の玩具であり、以降の教科書においても女兒に属するモチーフとして継続的に採用されていく。⁽⁹⁾ また、初版では「良き娘」と表現されていた箇所が、「静かなる、娘」へと改編され、さらにそれ「ゆゑ」に人形を愛して大切に扱うとなっている。

挿図では、店は完全に日本風の家屋に変化し、店員は女性に描きかえられている。輪は描かれなればかりか、実は毬もない。女性的な空間のなかで女性と人形との関係性がいっそう強調されているのである。女兒の遊びとして、輪廻しを排除し、人形が推奨された根拠は、おそらく輪廻しが激しい疾走を伴う遊戯であるためであろう。「静なる、娘ゆゑに、人形を、愛」するという論理は、女兒の活動を静的なものに制限していく可能性は十分にある。その一端として人形モチーフが関与しているのである。

4 (女兒と男兒) における翻訳と改編

最後に、(女兒と男兒) における人形モチーフについてみてみよう。元となる『ウィルソン・リーダー』では、次のように記述されている。

The girl has a doll. Do you see it? Do you see her lift it up? Is it a nice doll?

Ann, would you like a doll? O yes, I would like one very much? Will you get one for me?

Has the boy a doll too? No; the boy has a whip. Can not you tell a whip form a doll? Do you think the boy wants a doll to play with?

(中略)

You must take care of the doll, and good care of her clothes.

Can you make a hood or a bonnet for her, and little shoes for her feet?

Do you think she needs them to keep her warm? Can you tell me why a doll can not be cold?

(女の子が人形を持っています。わかりますか。女の子が持ち上げているのがわかりますか。それは良い人形ですか。

アンは人形が好きですか。はい、好きです。人形は好きですか。一体いただけませんか。

男の子も人形を持っていますか。いいえ、男の子は鞭を持っています。

あなたは鞭と人形を見分けられますか。男の子は人形遊びをするのに人形を欲しがると思いませんか。

(中略)

あなたは人形を世話して衣服を整えなければなりません。

フードやボンネット、人形に合う小さい靴を作れますか。

人形が暖かくすごせるように、それらは必要だと思いますか。どうして人形が風邪を引かないかわかりますか。)

挿図においては、前傾に人形を持った女兒が、後景では大変わかりづらいのだが、右手で棒のような鞭を持った男兒がいる。背景には何も描かれてい

ない【図7】。

文章の中核となるのは、ジェンダーの相違である。問答形式を採用し、「男の子も人形を持っていますか。いいえ、男の子は鞭を持っています。」「男の子は人形遊びをするのに人形を欲しがると思いませんか。」と問いかけることによって、子どもにジェンダー的に「正しい」答えを自ら選ばせるという仕掛けが組みこまれている。また、本項目の最後には、人形の衣服を整える、フードやボンネット、小さい靴を作るなどのケア役割を示すのみに留まらず、そうしなければならぬ理由を「人形が暖かくすごせるように、それらは必要だと思いませんか。どうして人形が風邪を引かないかわかりますか。」と考えさせ、正しい科学的な知識に基づくケア役割の遂行を促しているのである。一方、『小学読本』初版では、次のように翻訳されている。

此女兒は、人形を持てり、汝は、人形を見しや、○此人形は、愛らしき人形なり、○汝は、人形を好むや、○然り、我は甚だ、これを好めり、○此男児も、人形を持てるや、○否、男児は、人形を持たずして、鞭を持てり、○人形も、亦衣裳を着て、靴をはきたり、

すでに分析したとおり、ここでも「良い人形」は「愛らしき人形」に翻訳されている。また男児は鞭という攻撃的な道具を与えられ、アメリカ的なカウボーイ文化の名残を思わせる。特徴的なのは、『ウィルソン・リーダー』において力が置かれていたケア役割の重要性が、翻訳ではまたも省略されて、人形が衣服を身につけていることに関する簡単な描写に置き換えられている

点である。

挿図においては、これまで検討してきた箇所のような日本的なモティーフへの変更に留まらない改編がなされている【図8】。西洋風の室内で人形を抱いた女兒が椅子に座っている。男児は杖にも見まがう棒を持って立っている。女兒は芥子坊主に和服を着ているが、男児は帽子のような被り物に背広を着ている。右手前にはカーテンが確認でき、室内をのぞき見るようなしかけになっている。これまで見てきたように全体的に和洋折衷的な空間である。次に改訂版を見てみよう。

此女兒は、人形を持てり○汝も、人形を好むか○我も甚これ好めり、○此の男児は、人形を持たずして、鞭を持てり、男児の遊びは、女兒と異なればなり

最後の一文が削除された代わりに、「男児の遊びは、女兒と異なればなり」という強い表現でもって、ジェンダー的差異を決定付けている。

挿図では、基本的な空間表現は変わらないが、髪を伸ばした女兒が洋服を着用しており、男児の被り物は帽子らしく描かれている。和洋折衷的な空間は西洋的空間へと描き改められ、初版とのわずか一年の間に欧化政策の推進状況が見て取れる【図9】。

以上、人形モティーフが登場する三つの項目を分析してきた。『ウィルソン・リーダー』においては、女兒と人形の関係性が強調され、人形を使用したケア役割教育が重要視されていたことがわかる。それを翻訳した『小学読

本』初版では、全体的として和洋折衷的空間表現の中に女兒と人形の関係性を表現している。改訂版においては、より一層女兒と人形の結びつきが強化されるだけではなく、女兒の行動に制限を加える記述が追加されることでも、間接的に女兒の属性としての人形が示されている。

他方、『ウイルソン・リーダー』においては、人形に関する文章にケア役割がセツトされていたにもかかわらず、『小学読本』ではそれらは無視され、省かれていた。ケア役割は近代国民国家における女性の国民化、つまり良妻賢母主義に連なる必要不可欠な条件である。ケア役割をはじめとした良妻賢母主義よりも、まず女兒の属性としての人形を提示することが優先されているのである。

おわりに

『ウイルソン・リーダー』の中の「A CHILD'S MORNING PRAYER」と題された項目の挿絵では、子どもに神への感謝を教える母とその子が描かれている。だが、それに該当する『小学読本』の挿絵は、神棚を指し示す成人男性と手を合わせて祈る子どもに置き換えられている。家庭における教育主体としての母が描かれることは、『ウイルソン・リーダー』では必然性があつたが、明治初期の日本においては、いともあっさり男性に描き換えられているのである。

それは『小学読本』にかかわった男性知識人たちが表象に注意を払わな

ったためではない。むしろ彼らは表象の重要性を十二分に理解していた。『小学読本』のトップページには、『ウイルソン・リーダー』とは無関係の「世界の五人種」（亜細亜人種、欧羅巴人種、メレイ人種、亜米利加人種）を表わした挿絵が掲載されている。そのイメージソースはアメリカの地理教科書の図版にあるが、元になった図ではアジア人種の代表として辮髪の中国人男性だったものが、『小学読本』では散切り頭の日本人男性に変更されている。府川源一郎氏は、列強諸国に追いつき、アジアにおける筆頭「文明国」として自らを位置づける明治政府の欲望が示されており、明治の教育制度は、国家規模でそれを推進していくための大きな装置のひとつであったことを喝破している。⁽¹⁾

『小学読本』を分析した結果、女兒の属性としての人形、つまり人形のジェンダー化が推進されていたことが確認できた。一方で、ケア役割を中心とした良妻賢母主義への関心は、まだ途上にあつたともいえよう。学制はその根本的理念のひとつとして、「一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムヘキ事」、すなわち教育機会の男女平等を掲げていた。しかし、明治六年における男女別就学率が、男児三九・九%、女児一五・一%であった。男児にも増して女兒の就学率が低い現実を見ても、その理想がいかに達成しがたかつたかが想像される。⁽²⁾ それに加え、近代国民国家への統合を目的としたものであれ、『小学読本』が、女兒に対しいかなるライフコースをも示しえなかった点においても、その企ては未完に終わったことになる。

しかし、歴史的には、近代国民国家の基盤をなすジェンダー規範は確実に社会に浸透していった。本論文で取り上げた明治初期の教科書に表わされ

た人形のジェンダー化は、強力な伝播手段となって子どもたちを教化していったのではないだろうか。

皮肉なことに、女兒の就学率が圧倒的に低いことを考慮するならば、実際には男児に向けて、人形と女兒の分かちがたい結びつきを喧伝したことになろう。しかしながら、彼らが成長し、家長として近代家族を形成したであろう明治後期、それは近代国民国家としての本格的な良妻賢母主義の到来でもあったことを記しておく。

注

- (1) 詳しくは、府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究 リテラシー形成メディアの教育文化史』ひつじ書房、二〇一四年、二五三〜三二五頁を参照されたい。
- (2) 山崎明子氏は、「国定期」つまり一九〇四（明治三七）年に始まった国定教科書制度において発行された図画教科書に関する考察をしている。山崎氏は、女子には手芸的なモチーフが推奨される一方、男子には砲弾や馬標などの軍事的なモチーフが与えられたことを分析している（『科学研究費研究報告書 美術教育とジェンダー』2010—2012年度基盤研究（C）「近代の視覚空間—教育とジェンダーをめぐる政治学二〇一三年三月」）。
- (3) 増淵宗一『禁断の百年王国—少女人形論』講談社、一九九五年。また

増淵氏は、『小学読本』の挿絵における人形と女兒に関する分析を行ない、近代においてはじめて人形が女兒に属するものになった過程を考察している。本論文は『小学読本』をさらに『ウィルソン・リーダー』にまでさかのぼり検討を行ないたい。

- (4) 本項目は、文部省編『学制百年史』帝国地方行政学会、一九八一年、一一三〜二〇四頁を参照した。
- (5) 仲新・海後宗臣『近代日本教科書総説 解説編』講談社、一九六九年、一五三頁。
- (6) ドウトカ・マウゴジャータ「明治初期の教科書——田中義廉『小学読本』とWilson Reader——」『日本学報』大阪大学日本学研究室、一九九六年。
- (7) 小川清実『子どもに伝えたい伝承あそび』萌文書林、二〇〇一年、一八七〜一八八頁。
- (8) 増淵前掲書、二四〜二八頁。
- (9) 山崎前掲書、一三〜二七頁。
- (10) 吉良智子「あるべき」女兒用人形とは何か——「妊娠」した女兒用人形をめぐる——山崎明子・藤木直実『〈妊婦〉アート論 孕む身体を奪取する』青弓社、二〇一八年。
- (11) 府川前掲書、二七四〜二九四頁。
- (12) 文部省編前掲書、一九五頁。

〔図版出典〕

- 【図1】 Marcus Willson: *The Readers of the School and Family Series. Willsons' First Reader. Part III, Lesson VII.* New York: Harper & Brothers. 1860.
- 【図2】 (女兒と人形) 『小学読本』巻一、第四回、初版 明治六年
- 【図3】 (女兒と人形) 『小学読本』巻一、第四回、改訂版、明治七年
- 【図4】 Marcus Willson: *The Readers of the School and Family Series. Willsons' First Reader. Part III, Lesson XIII.* New York: Harper & Brothers. 1860.
- 【図5】 (玩具店) 『小学読本』巻一、第四回、初版 明治六年
- 【図6】 (玩具店) 『小学読本』巻一、第四回、改訂版、明治七年
- 【図7】 Marcus Willson: *The Readers of the School and Family Series. Willsons' Second Reader. Part I, Lesson I.* New York: Harper & Brothers. 1860.
- 【図8】 (女兒と男児) 『小学読本』巻二、第一回、初版 明治六年
- 【図9】 (女兒と男児) 『小学読本』巻二、第一回、改訂版 明治七年

〔附記〕本研究は JSPS 科研費 17J40216 の助成を受けたものです。

(日本学術振興会特別研究員)